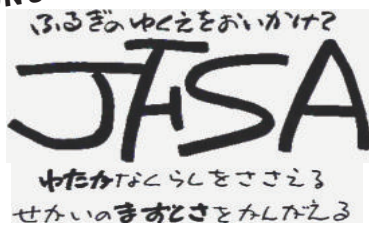


衣のNGO



NP0 法人日本ファイバーリサイクル連帯協議会
〒260-0001 千葉市中央区都町 3-14-10
Tel・Fax : 043-234-1206 (木曜定休)
E-mail : jfsa@f3.dion.ne.jp
ホームページ : <https://jfsa.jpn.org>

会報 55 号 2021 年 5 月



アル・カイルアカデミーの近くの古着バザールの様子(2020年3月撮影)
バザールや町中の商店では、衣類、雑貨類、台所用品、自動車部品、
電気製品、家具・・・様々な中古品が売られている 【本誌 12ページ関連写真】

目次

アル・カイルアカデミー近況報告	2 ~ 3p
縫製工房スタッフ アーディルさんへのインタビュー	4 ~ 5p
kar-khana (カルハナ) 事業紹介「秋冬物商品に向けて」	6p
第 71 回コンテナ到着・72 回送り出し報告	7p
フォトギャラリー「洗う・洗濯する」	8 ~ 9p
東葛センター便り「感じ取る」	10p
千葉センター便り「都町の古着屋・チャルカバザール」	11p
JFSAに届いた古着のリユース	12p

◆◇会報についての感想やご意見を
お気軽にお寄せください◇◆

JFSAまでメールでお送りください
jfsa@f3.dion.ne.jp



←こちらの QR コードを
読み取っていただくと、
メール作成画面に
なります。

アル・カイルアカデミー近況報告

海外事業担当事務局 依知川 守

アル・カイルアカデミー（以下アル・カイル）は昨年9月に再開されて以降、本校の8、9、10年生とカレッジは通常の授業が行なわれましたが、7年生以下の生徒は「月水金」または「火木土」、それぞれ生徒が交代で学校に通うことで1日あたりの登校者数を約50%減らし運営してきました。しかし、最近ではカラチで感染者数の多い地域に限定したスマートロックダウンが行なわれていると聞いています。また隣国インドでは新型コロナウイルス感染が非常に拡大しているとも報じられています。アル・カイルの状況や、現地の人々の暮らしについて、5月9日ムザヒル校長にオンラインでインタビューを行いました。また現地新聞のネット版情報からも一部引用しています。

Q パキスタンでも感染者数の増加が報じられています。現在の状況を教えてください。

A パキスタンでは州によっても違いがありますが、全体としては再び新型コロナウイルスが感染拡大しています。そのため政府は広範囲のロックダウンを行なうことを決定しました。こ

れにより工場や店、学校などが閉鎖されています。交通機関も大幅に制限されていて、バスは全て止まっています。自家用車での移動は許可されていますが乗車人数は3人に制限されています。物の輸送も食料など生活必需品以外は制限されている状況です。

（注）パキスタン政府によるロックダウンの実施状況

- ・すべての教育機関の閉鎖。
- ・4月29日からは都市間輸送を閉鎖。
- ・市場は午後6時に閉鎖。
- ・レストランでの屋外・屋内での食事の禁止（持ち帰り・配達のみ可能）
- ・刑務所への訪問禁止。
- ・政府機関は重要なスタッフ（全体の20%程度）により機能を継続する。

このロックダウンの宣言を受け、アル・カイルも5月8日から休校にしました。州政府は今後の感染者数の推移をみて、5月16日頃に再び方針を定めると言っています。ただ自身は今の感染状況を見る限りロックダウンの解除は暫く厳しいと思っています。カラチのスラム地域の住民の多くは依然として病院に行く事を恐れており、実際の感染者数を把握することはとても困難です。

Q 隣国インドでは感染者数が非常に増加していると報じられています。パキスタンにも何らかの影響はありますか？

A 私の両親はインドから分離独立する際にパキスタンへ移住してきました。今もインドのデリーには沢山の親戚が住んでいます。彼らとは電話連絡をしています。つい先日は叔父が新型コロナウイルスの感染で亡くなったと聞かされました。デリーもロックダウンされており、現地は非常に厳しい状況のようです。またパキスタンはインドと国境を接しており、不法に行き来する人も多くいます。パキスタンでの感染が更に広まる懸念されています。

Q 4月12日から5月12日の1ヶ月間がラマザン（断食月）と聞きました。今年のラマザンでは、新型コロナウイルスやロックダウンの影響はどのようにあるのでしょうか？

A 毎年ラマザンの月には、本校や各分校で、生徒や先生、そしてスタッフも含め数百の家族に対して約20日分の食料配給（小麦、米、油、豆類、砂糖、茶葉など）を行なっています（写真）。ラマザンには1日の断食明け（日没後にイフタールという食事をと

1時間だけでも、また全生徒の10%だけでも、交代で学校へ呼んで授業を開きたいです。生徒達との関わりを何とか継続させたいのです。またこれはまだアイディアの段階ですが、上級生が下級生に勉強を教える仕組みを作り、それに対する手当てとしてお金や物資を手渡すということも考えられます。無償で物資の支援を続けるということは長い目で見て問題となることを私は知っています。子ども達の教育の機会を作ろうという目的を、生徒達とも共有した上で行動をすることが大切だと考えています。

J F S Aの会員、支援メンバーの皆さんへメッセージをお願いします

A 新型コロナウイルスは世界中の問題です。パキスタンや私たちの学校だけの問題ではありません。この状況がワクチン等の開発や普及によって少しでも改善され、世界中の人の人生が今より良くなって欲しいです。私たちは今、世界中の人々のために祈っています。これまでJ F S Aの皆さんとの26年に及ぶ関わりでは、アフガン戦争下で子ども達が学び続けるための支援、また洪水や大地震の被災者の支援も含め、様々な困難の中で共に活動してきました。そして今は新型コロナウイルスによって世界中に困難がもたらされています。問題の無い時に行動に移すことは簡単です。しかし私た

る（写真）のですが、果物など一部の食料は値上がりする傾向があり、スラムの人々にとって食事を用意することは困難なのです。本来ならラマザンの間も日雇い仕事で収入を得て、イード（1ヶ月の断食明けの祝祭を迎えるのですが、ロックダウンにより様々な仕事が無くなってしまい、暮らしは更に厳しくなっています。特に大変な第2、第3、第8分校の先生や生徒には、服や靴も提供しました。例年ラマザンのこのような支援活動にはザカート（喜捨）が充てられるのですが、今年はコロナ禍で事業的に厳しい人が増えていて、寄付額が減っている状況です。



食料配給の品物を受け取る生徒

ちは困難な状況の時こそ、お互いに考え、行動に移すことが大切なのです。日本の皆さんからも、私たちに何か出来ることがあれば相談して欲しいです。

J F S Aより 今日インタビューの時間をありがとうございました。これからの計画が決まりましたら、ぜひJ F S Aにも共有してください。これからも一緒に考え、行動しましょう。



今年の日没後のイフタールの様子（アル・カイルスタッフ、先生）
通常は親戚や仲間を招待するが、今年は招待はせず
身近な仲間や家族で過ごす人も多い

Q このロックダウンが学校にどのような影響を与えていますか？

A ミドルクラス以上の子どもたちが通う学校ならオンライン授業も可能ですが、アル・カイルのようなスラムの子ども達にはそのような学びの機会がありません。更にロックダウンにより学校で勉強ができないということは生徒が教師に直接会って学ぶという機会そのものを奪われることです。生徒や、また教師達にとっても学校から気持ち離れてしまう可能性があります。実際教師たちにも当然暮らしがあるので、別の仕事を

探すということにもなりかねません。本来、学校の年間経費は6千万ルピー（1ルピーは約0・65円）程度です。その約半分以上が教師の給料で、残りの約半分以上が材料や食料、その他の経費です。今年は現在のところ寄付金が1千万ルピー程度減少しています。厳しい状況ですが、私たちは何とか教師の給料を支払い続けられるようにしたいと考えています。

Q このコロナ禍で、生徒達から心配事などを聞きますか？

A 私たちは様々な学年の生徒を学校へ呼び、話を聞いていますが、年少の生徒達は大きな心配事や問題は無いようです。しかし9、10年生、カレッジの生徒達は暮らしの心配を口にする生徒もいますし、言葉に表せずとも表情に不安が滲ませている生徒もいます。親の仕事が無くなり、更に学校が休校になってしまっている、今後の人生に対する不安が心理的に大きな負担になっていると感じています。今後もこのような社会状況が続けば、若者による犯罪の増加など大きな問題に繋がると思っています。何とかそのような状況は避けねばなりません。

Q 今後はアル・カイルとしてどのような事を考えていますか？

A 今後の学校再開については政府の政策次第ではありますが、私たちは1日に



休校前の学校の様子
給食を取るスペース、給食調理室が改装された

2021年5月6日、現地時間午前8時半に縫製工房と日本を結んでオンラインによるインタビューを行ないました。

パキスタンは現在イスラームにおけるラマザン（断食月）の最中で、日中はロザ（日中の断食）をすることが宗教上の義務の一つとなっています。そもそもラマザンとはヒジュラ暦（太陰暦）で9月を意味し、この月にコランが預言者ムハンマドに啓示されたのだそうです。ムスリム（イスラム教徒）にとって、ラマザンは「聖なる月」だとされています。挨拶はこのように始まりました。

依知川「ラマザン・カリム（恵み多い月ラマザン）おめでとうございます。今日はJFSAの会報で紹介するために、あなたにインタビューさせていただきます。」

アーディル「ありがとうございます。JFSAの皆さんの会報で紹介してくれることを嬉しく思います。昨日、あなたがメールで質問を送ってくれたので、私は答えを考えていました。」

Q まず、あなたの住まいはどこですか？

A アル・カイルアカデミー本校のある、ニューカラチのムスタファコロニー地区です。本校から50mのとても近い所で歩いて5分もあれば着きます。

Q ご両親やあなたの生まれもこの近くなのですか？

A 元々私の父はパンジャーブ州のムルタンで生まれ育ち、その後家族とともにカラチへ移住しました。母はカラチ出身です。父と母はカラチで結婚し、市内のマールタウンという町で暮らしていました。今の家からは20km程離れたところです。私はその町で生まれ、1993年、3歳の頃に両親や兄弟とともに今の場所へ引っ越ししました。

Q 今の家族構成を教えてください

A 両親と私の弟3人、私の妻と子ども3人、そして兄夫妻と子ども4人の合計16人で同居しています。9人の大人と子どもたちが7人です。姉は結婚して他の家で暮らしています。

Q 縫製工房で働き始めたきっかけ、また感じていることを教えてください。

A 私は2011年に大学を卒業したのですが、その年の11月にアル・カイルのムザヒル校長の元へ、学校で仕事をさせてもらえないか相談に行きました。私は教職を志望していましたが、当時開設が進められていた縫製工房に携わることを勧められ、工房のメンバーとして仕事を始めました。縫製工房でJFSAの皆さんと直接関わることになり、皆さんがアル・カイルの子どもたちの教育の機会を作るという目的で活動していることに共感し、この仕事を頑張りたいと考えるようになりました。

私が仕事を始めた頃、カラチに赴任していたJFSA事務局の西村さんは、仕事に対してとても厳しかったですが、私たちは彼から多くを学ぶことができました。また西村さんは製品の検品をしながら時々歌を歌ってくれました。よく一緒に昼食をとったりチャイを飲んだりもしました。ピクニックに連れ出してくれたこともあります。本当に私たちを可愛がってくれました。当時、特に西村さんや田邊さんと一緒に過ごした思い出は私の中に財産

Q あなた自身がアル・カイルアカデミー（以下アル・カイル）の卒業生だと聞きました。入学するきっかけは何だったのですか？

A 私の父の仕事は借りたりヤカーでの廃品回収です。日雇い仕事で給料は少ない上に安定せず、家族の暮らしはとても厳しいものでした。アル・カイルは1987年に数名の生徒とムザヒル校長で始められたと聞いていますが、私たちが引っ越してきた頃にはこの学校はしっかりと教育が受けられると評判でした。両親も私自身も、入学を希望して、入学申請をしました。

Q 学校の印象はどのようなものでしたか？

A 私が1995年に入学した頃は、まだ8つ位の教室しかなく、ムザヒル校長を含め先生は6人位だったと思います。勉強をするだけではなく、とても大切な友達と出会え、今でも付き合っています。他の学校との違いは、教科書だけではなくムザヒル校長による独自の教材を使っていることや、先生の教え方が分かりやすいことだと思います。私たちの兄弟は皆この学校へ通いました。今弟のアーティフはアル・

として残っています。

私はこの縫製工房でよい良い仕事をすれば、より沢山の子どもたちのサポートに繋がるというところに一番やりがいを感じています。また製品を作る過程で様々な具体的な仕事に携われることも嬉しいのです。今後、この縫製工房をより大きい仕事に成長させたいです。そのためにもそれぞれの仕事がいしっかりと連携し合うシステムを作りたいと考えています。

Q 縫製工房以外に仕事はしていますか？

A 今のラマザンの期間は異なりますが、通常は8時半〜17時まで縫製工房で仕事をしています。そして帰宅すると直ぐに近所の子ども達を自宅に集めて勉強を教えています。17時過ぎ〜21時が授業の時間で、現在は2年生〜12年生まで15人の生徒がいます。教師は私1人ですが、妻も手伝ってくれています。

Q アル・カイルで学んでいる子ども達に何か伝えたいことは？

A アル・カイルは素晴らしい学びの場です。授業で子ども達は表面的なことだけでなく、詳細を理解すること

カイルのカレッジ2年に在学しています。

Q 10年生終了の試験マトリックをパスした後、あなたはどのように進学しましたか？

A 私は2006年にマトリックをパスしました。その後、父の助けでカレッジへ進学し、更に大学へ進学しました。一方、私はカレッジ進学と同時にTシャツ工場仕事を始め、5年間働きしました。その工場では生産現場で様々なことを知る事はできましたが、そのまま仕事を続けていても将来の展望が開けないと考え、辞めることにしました。



縫製工房のメンバー（右から2番目がアーディルさん）仕事の合間の休憩時間には、皆でチャイを飲みながらお菓子をつまむのが日課

ができると思います。親達にも、ぜひ子ども達が学び続けられるようにして欲しいです。

Q 趣味は？（余暇の過ごし方）

A 特に趣味は無いのですが、月に1度位、友人達とクリケットをします。運動をしないと体が弱ってしまいますから（笑）！他に、趣味ではありませんが大学で学んだ会計について、コンピューターを使い今も学習しています。この知識は仕事の上でも是非活かしたいと考えています。

Q もう直ぐイード（断食明けの祝祭）ですね。あなたの住む町の人たちはどのように過ごすのですか？

A 私たちはイードのために、高いものではありませんが新しい民族服を1〜2着作ります。イードの初日に男性達はモスクで大きな合同礼拝があり、私たちは新調した服を着て祈ります。1ヶ月の断食は神に与えられた義務ですが、イードは神様から私たちへの贈り物だと感じます。



3人の子どもたちとアーディルさん



秋物新商品に向けて

kar-khana事業担当事務局 小島 慧

縫製工房ではコロナ禍においても商品製作が行なうことができています。ありがたいことに様々なお客さんから相談や、実際にオーダーも承ってきました。

また、各店舗や再開されつつあるイベント販売でも、今までの古着以外の商材としてリピーターしてくれるお客さんが増えてきました。そういった中で新たな商品が必要不可欠となつていきます。そこで、お客さんの声や、現在の商品構成、各スタップの今までの経験や知識、こんな服があったら...といった願いも交えながら今年の秋に向けて新商品の開発を始めています。

4月からスタップ内で話し合いの場を設け、実際に商品として販売が始まるのは9〜10月ごろを予定しています。今まではデニムと生成りの生地が中心でしたが、以前にもご紹介した手織り生地「カディ」の新たな柄や、初めて使用する生地でサンブルも作っていく予定です。残念ながらこの製作期間の間もパキスタンへの派遣は難しく、オンラインや画像での詳細確認を行ないつつ、国際



kar-khanaとしてのイベント出店の様子

貨物を用いたサンプルのやり取りで一つずつ新商品を完成させていく予定となつていきます。

JFSAとして今までにないこの仕事の流れは試行錯誤の連続となつていきます。なかなか思い通りに進まないこともあります。一歩ずつ進めてまいります。kar-khanaの新たな商品が店頭で並ぶのを今しばらく楽しみにお待ちいただければと思います。



kar-khana

商品紹介 シャルワール

会員の皆様にもすでに聞きなじみのある単語かもしれません。ウルドゥー語でズボンの意味であるシャルワール。パキスタンでは国民の多くが宗派の違いはあれどもイスラム教徒です。そんな彼、彼女らの日常着であり、男性と女性でデザインが異なります。

今回紹介するのは男性が履くタイプです。腰から下、膝までがとても大きく膨らんでいます。ウェストも腰紐で絞らなっています。くるぶし付近になると裾を擦らないような工夫がされていて、デザインだけでなく、機能的にも考えられています。パキスタンでは薄地のとても乾きの良い素材で作られていますが、日本で販売するにはうすすら透けてしまうのが難点だったため、デニムの生地と透けない厚みの生成り生地で作りました。

これからの季節にTシャツにサンダルでちょっとそこまで、と散歩に出るのにはとても重宝します。履いてみるまではなかなか想像が難しい商品ですが、写真を参考に気になった方は店頭まで足を運んでいただければ幸いです。

パキスタンの男性の日常的な服装
AKBG事務局カユーンさん(左)と、
学校の改修工事を行なっている職人さん



パキスタンへのコンテナ送り出し・到着報告

◆第71回コンテナ到着

2021年1月19日 コンテナ積み込み
@ JFSA海外衣料支援センター
↓ 3月7日 パキスタン・カラチ港到着
↓ 3月19日荷下ろし

第71回コンテナの古着等(23トン549kg)はAKBGが卸業者ワリー氏・ニアーズ氏に1kgあたり114ルピーで販売し、経費を差し引いた最終的な利益は54万5336ルピーとなりました(1ルピーは約0.65円)。

昨年より続くコロナ禍はコンテナの国際物流にも深刻な影響を与えています。第71回コンテナについても、コンテナの予約がなかなか取れず、海上運賃はコロナ以前の約3倍に値上がりし、到着も2週間程遅れが出ました。コンテナの数が不足していることが原因と言われていますが、主には中国でのコンテナ生産の減産や、欧米の港湾業務の人員不足によりコンテナが港に滞留していること、米国の巣ごもり需要の増加に伴いコンテナ物量の増加等が要因としてあげられています。今回の経費の増加分は卸業者と交渉し、卸売価格に運賃の値上がり分を上乗せすることで折り合いが付きしました。卸業者ニアーズ氏が扱う古着の多くは、アフガニスタンの買付業者に卸売しています。東南アジアの古着マーケットはコ

ロナにより流通が乱れ大きな影響を受けたそうですが、ニアーズ氏のアフガニスタン向けの商売は大丈夫だと聞いています。

◆第72回コンテナ送り出し

2021年3月31日
積み込み重量24トン403kg
↓ 4月4日横浜港出港

今回も日頃古着選別作業に参加している千葉ダルクや協力団体あうん、回収協力団体の方々が積み込みに参加しました。人数の制限をしてフォークリフトを使って行なう作業は5回目となり、一連のながれもスムーズになりました。機械のパワーを存分に活用しながら、人力に頼らざるを得ない部分は皆の力を結集して550個の荷物を無事に積み込みました。

今回のコンテナには2021年1月〜3月中に送られた荷物の内、選別が済んだものが積み込まれています。この期間の回収量は約33.5トンで前年同期を上回る量となりました。日々、事務局、アルバイト、選別協力団体が作業を途切れずに進め、第72回は前回から2ヶ月と10日程で実行することができました。

その間、古着の圧縮・梱包作業にあ

たる大学生のアルバイトが新しく加わりました。彼は元々店舗のお客さんとして来ていましたが、パキスタンに古着を送る活動にも関心を持ってくれました。店舗にはここの1年程で10代・20代の若年層の来店がとて増えています。常連さんの中にはコンテナ積み込み作業の手伝いに手を挙げてくれる若者もいます。今は難しい状況にありますが、いつの日か古着を通して出会った若者たちと現在参加している多様な人・世代が混ざり合い、「教育の機会を支える」事業のための送り出しをいっしょに作っていったら...と願っています。もちろん大鍋で作るパキスタンカレーの昼食付きです。

第72回の送り出し ボランティアの皆さんと
(JFSA千葉センター)第71回コンテナ パキスタンでの荷下ろし
写真右)AKBG事務局カユーン氏(左)と荷下ろしを行なう荷役労働者(右)
写真左)荷物を倉庫へ運び込む学校スタッフのアサド氏



カラチ市内の小さな染色工場
縫製製品に加工するための生地を洗っている



カラチ市内を流れる川沿いにある洗濯屋さん
川原一面に洗濯物を干している

دھونا

ドナー

フォトギャラリー

「洗う・洗濯する」



パキスタン中部ダドゥの農村地域
水路で洗濯をする女性たち



バラコート(北部山岳地域)の暮らし
雪解け水が流れる川から各家に水を引いている
食事の後片付けをする子ども
油で汚れた鍋に砂をつけて洗っている



アル・カイルアカデミー本校近くの家の台所
スラム地域は上下水道の設備がないため、
買ってきた水をタンク(左の青い容器)にためて炊事や洗濯に使っている

感じ取る

事務局が最後にパキスタンを訪問したのが昨年3月なので、1年以上訪問していないことになりました。自分は1年半以上です。こんなに期間が空いたのは活動が始まって以来初めてです。業務上、報告、連絡、相談し合うことが多いので、ほぼ毎日パキスタンの誰かと電話やメールでのやり取りをしています。これまでのように「次回そちらに行つたとき直接確認する」という結びは使えなくなりました。

事業で連帯することにより継続した活動を行なうことが目的の一つであり手段としており、それらは数字を見て確認できる部分もあります。日本側では衣類等の回収量や販売収益など、パキスタン側では生徒数や現地での販売収益などの実績についてです。ただ、その手段を用いて支える教育活動によってその先に望むこと、子どもたちがより良い暮らしを得られるようにといったことに関しては、直接感じたいと思っています。インフラの整備や公衆衛生、識字率など、数字で表せることもあります。学校で学ぶ子どもたちが実際に暮らす環境や、そこで暮らす人たちがどういう表情で現在の状況や希望する将来を話すのかといったことは、メールや電話ではなかなか感じえません。

現地に行つた際も日中は担当業務に取り組んでいるためなかなかそうしたことを感じる機会は多くないのですが、車での移動中や休憩時間、食事の時間は直接話をする大事な機会となります。身近な最近の出来事から大きなニュース、他愛もない話、家族や自分の話など、日本で友人や同僚とするのと同じような話をします。話す人それぞれが違う環境で育ち、暮らす中で感じて思っていることなので、個別でばらばらな話です。ただ、当然それぞれ社会とつながっていることで、個別の話から社会を感じることが出来ます。数字で表せることではなく計りづらいますが、目的を達成するための動機はそうして感じたことから得たいです。

東葛センターでの仕事でも同じように思っています。みんなの意見を求めるあらたまった機会を設けるだけでなく、日常的な作業の合間のお茶飲み話やコンテナ荷下ろし後の全員での食事の時間などで、個別にそれぞれがどういった環境での働き方を望むのか、またどういった将来を望むのかを他愛のない話の中からお互いが感じ取って作っていったら良いと思っています。理想ですが、望みたいです。

都町の古着屋・チャルカバザール

千葉店の店名を「チャルカバザール」と付けてから、約1年が経ちました。

色々な人が行き交い、色々なものが売られていて、人と人との色々なやりとりがある「バザール(市場)」。そして、糸車を意味する「チャルカ」。糸を紡ぐように人と人との出会い、繋がりが広がっていく場にしたという想いで付けた名前です。1年経った今、「これってチャルカバザールらしいな」と感じられる事柄が増えました。

ここ1年程の間で10代〜20代の若い世代のお客さんの来店が増えていきます。2〜3人で試着しながら楽しそうに買い物している姿が毎日見られます。現在若い子には、男女ともにストラップスやポロシャツ、ベスト、などの男性物商品が人気です。それらの商品はこれまではおじさんが買っていくことが多かったのですが、若い子も一緒に商品を選んでいる光景は、これまでにはない新鮮さがあります。

店頭で売っている野菜(ダルク・虹と風のファームより委託販売)に目を留めて、お母さんにと購入してくださる方、試着している若い男の子に常連のおばさまが「似合うわね、良いじゃない」と声をかけたり、閉店時間までお店にいる子たちは自然とお店の片付け作業を手伝ってくれたり：ということもあります。

千葉店では、昨年10月〜今年4月までの間で、延べ15058人の方(1日平均85人)が買い物をしてくださり、合計で37504点の古着類がリユース販売されました。男性物の古着は売り切れで品不足が続いており、輸入古着の到着を待ちわびているところです(6月初旬到着予定)。

初めはお店に来て下さったお客さんと店員という関係ですが、それを飛び越えたり、別の角度からの関係性だったり、お客さん同士の繋がりがったり：を、チャルカバザールでは作っていきたいと思います。そのことが、JFSAの活動が広がっていくことに繋がると考えています。言葉で書くことと繋がることに感じますが、ここに書いたような、日常の中にあるちよつとした出来事の積み重ねだと思っています。

倉庫をお店としているのも、「都町の古着屋」と掲げているのも、様々な人が関わっているJFSAの活動の場を、お店に来る方に断片的にでも感じ取ってもらえるようにするためです。初めから、活動そのものに興味をもってお店に来てくださる方はほんのわずかです。古着を買いに来たけれども、何となくただの古着屋ではなさそうだな、何だろうな、と思ってもらうことが、まずはきっかけとなれば良いと感じています。



毎月第2土曜日に行なっている「軒先市」古着の売り出しのほか、地域のグループが参加して野菜、手作り品、リサイクル品、ランチやスイーツなどの販売を行なっている

昨年の秋に、お店の屋外売場の屋根の設置を千葉ダルク(薬物依存等の回復施設)の皆さんに手伝っていただきましたが、その屋根の拡張工事をお願いして4月に完成しました。

ダルクの回復プログラムの中には、就労訓練期間がありますが、中には就労先を見つけるのが難しい仲間もいるそうです。そうした仲間も経験を活かしながら仕事ができるよう、今ダルク自身で仕事探しをしています。野菜作りや便利屋、弁当屋などを考え、就労継続支援B型の認可を取る計画を進めています。

屋根の拡張工事は、便利屋チームに仕事として行なってもらいました。ダルクの活動の変化に合わせて、協力関係の形が変わっていくことはとても嬉しいことです。

※便利屋の仕事での収入で先日軽トラを購入したそうです！畑仕事に活躍中！

千葉センター担当事務局 大橋紀子

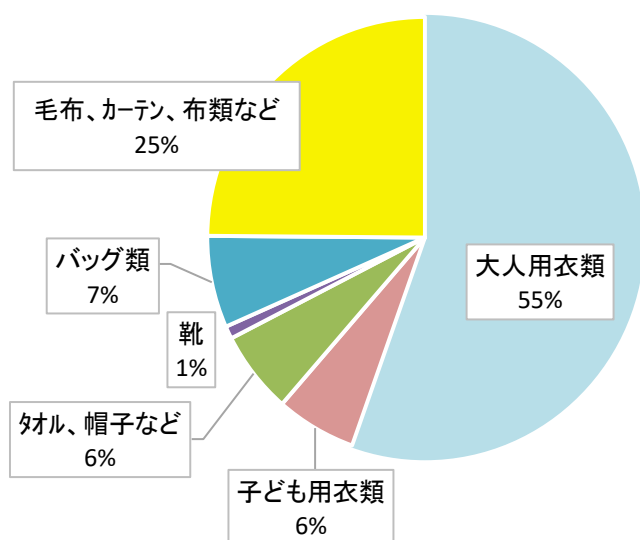


食事をしながら楽しく美味しく報告、相談

東葛センター担当事務局 田辺航太郎

JFSAに届いた古着のリユース

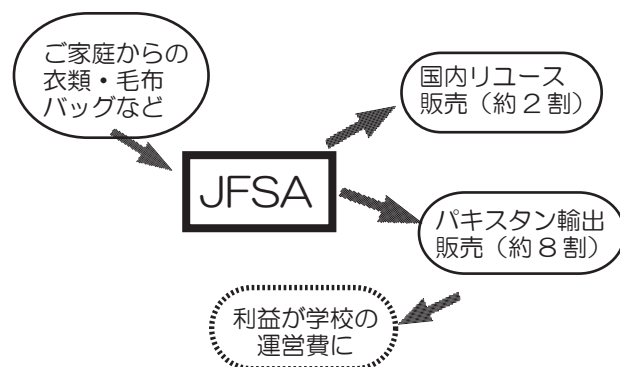
2020年6月～2021年3月
第69回～72回パキスタン送り出し 種類別の重量比
合計 95トン549キログラム



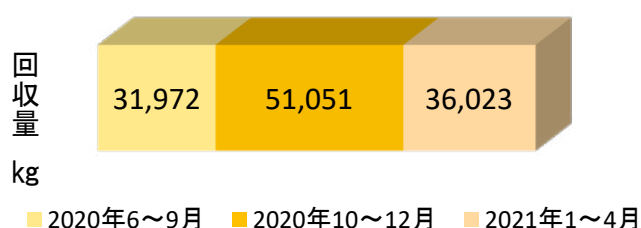
JFSA では1年間に約120トンの衣類や毛布、バッグなどを回収し、8割をパキスタンに輸出しています。2割は国内でリユースします。

パキスタンへの輸出は1年間に4回で、選別した後、種類別に50キログラムの梱包をしてコンテナで送り出します。

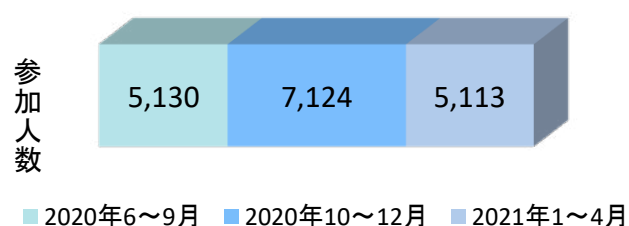
昨年の春以降、新型コロナウイルスの影響が懸念されましたが、予定していた送り出しは無事に行なうことができました。次回の輸出は6月に行ないます。



2020年6月からの回収量 119トン46キログラム



2020年6月からの参加人数 1万7,367人



JFSAにかかってくる電話で、“友人に教えてもらったのですが”、“遠方に暮らす娘にきいたのですが”という前置きで、回収についてのお問合せをいただくことがたびたびあります。回収案内を郵送することもありますし、ホームページを紹介することもあります。いろいろな方たちがいろいろな方法でこの活動を支えてくださっていることが、上記のグラフに表した結果につながっています。

ご協力ありがとうございました！

カラチ市内のバザールの様子
古着がたくさん売られている



2020年度の会員・支援メンバーを募集しています (2020年10月～2021年9月)

2020年度 正会員 個人：155名、団体：10 賛助会員 個人：1169名、団体：7 (5月11日現在)

JFSAは正会員及び賛助会員(支援メンバー)で構成されています。

皆さんの参加が、パキスタンの人々との連帯事業を推し進める力になります。

会員・支援メンバーの方には、会報・回収案内(年3回)、サポーターグッズ(年1回)をお送りします。

●年会費(10月～翌年9月末)

個人：会員 5,000円 / 支援メンバー 2,000円
団体：会員 50,000円 / 支援メンバー 10,000円

●会費振込み口座(郵便振替)

番号：00160-7-444198 口座名：JFSA
*活動への寄付にも同じ口座がご利用できます。
通信欄に「寄付」とお書き添え下さい